

フレーム意味論に基づく中国語の“防止”と“避免”の類義分析 ——日本語の「防ぐ」・「避ける」との比較を兼ねて——

An Analysis of Synonyms Based on Frame Semantics: A Comparison of the Chinese
Verbs *Fangzhi* and *Bimian* and the Japanese Verbs *Fusegu* and *Sakeru*

朱 薇娜[†], 松浦 光^{††}

Weina Zhu, Hikaru Matsuura

Abstract In this paper, we compared the synonymous phenomena of two Chinese verbs, *Fangzhi* (prevent) and *Bimian* (avoid), with the Japanese verbs, *Fusegu* (prevent) and *Sakeru* (avoid), with a selected emphasis on the complex sentences with two clauses. In these two clauses, one represents purpose while the other expresses the method for attaining the purpose. In particular, we classified the negative events of the purpose clause into five subtypes based on several factors pertaining to transitivity, including the number of participants in an event, the activity or non-activity of an event, the agentivity of the subject, and volitionality in an event. Our analysis showed that Japanese was analogous to Chinese on four of the aforementioned subtypes, but they didn't match in the events with inanimate subjects.

1. はじめに

本稿は、中国語の“防止”（防ぐ）と“避免”（避ける）が特定の文脈において意味が近く感じられるという現象をめぐって、共起する事象のタイプや、両語の意味の差などを明らかにするものである。また、日本語の「防ぐ」と「避ける」においても同じような傾向がみられるため、本稿では中国語と日本語の対照分析も行う。

まず、次の (1ab) (2ab) では、“防止”「防ぐ」と“避免”「避ける」の両方が使用可能で、意味も近いと思われる¹。

- (1) a. 备份数据库的主要目的是为了 {防止/避免} 数据丢失。
b. データベースをバックアップする主な目的はデータの消失を {防ぐ/避ける} ことである。
- (2) a. 为了 {防止/避免} 今后发生类似的错误, 我们必须尽快采取措施。
b. 今後、同じような間違いの繰り返しを {防ぐ/避ける} ために、我々は一刻も早く対策を取らなければならない。

一方、次の (3ab) (4ab) では、“防止”「防ぐ」か“避免”「避ける」のいずれかしか容認できない。

- (3) a. 老师为了 {防止/?避免} 学生上课打瞌睡, 用过哪些方法?
b. 先生は学生が授業中居眠りすることを {防ぐ/?避ける} ために、どのような方法をとったことがありますか。
- (4) a. 为了 {?防止/避免} 见到前男友的尴尬, 她决定不去参加今晚的宴会。
b. 元彼氏に会う気まずさを {*防ぐ/避ける} ために、彼女は今晚の宴会に参加しないことにした。

このように、防ぎたい事象も避けたい事象も主体にとって望ましくないことという点で共通しているが、(3ab) (4ab) が示すように事象によって「防ぐ」か「避ける」かで共起の容認度が異なる。本稿では、以上のような言語事実に基づき、“防止”「防ぐ」、「避免」「避ける」とそれぞれ共起する望ましくない事象を考察し、意味が近く感じられる場合の望ましくない事象の特徴及びその

[†] 愛知工業大学 基礎教育センター (豊田市)

^{††} 横浜国立大学 国際戦略推進機構 (横浜市)

¹ 本稿における例文の容認度判断は、執筆者も含めてそれぞれ日中語の母語話者 5 名によるものである。?は容認度がやや低いこと、??は容認度が低いこと、*は非文を表す。また、字数の関係上、本稿の例文は実例に基づいた筆者による作例である。

要因を明らかにする。

本稿の考察対象は、日中両語において互いに類義関係をもつ「防止」、「避免」、「防ぐ」、「避ける」とする。本稿の構成は次のようになる。まず第 2 節では、本稿で用いる認知言語学の諸概念を概観する。次に第 3 節の先行研究では、辞書における考察対象の 4 語の意味記述を確認した上で、「防止」の構成要素の「防」、「避免」の構成要素の「避」の意味特徴、および「防ぐ」、「避ける」の基本義の意味特徴を明らかにする。続く第 4 節では、対照の便宜上、考察の対象を「防止」「防ぐ」、「避免」「避ける」が用いられる「为了 A, B」「A のために、B」のような特定の構文に限定する。このような構文では、防ぎたい或いは避けたい不利益な事象と、それらの事象が生じないように対策する行為の 2 つが存在する。事象のフレームを手掛かりに、不利益な・望ましくない事象などを分類し、それぞれの語との共起可能性を分析する。第 5 節では、中国語と日本語の共起の不一致に焦点を当て、その理由を探る。最後に第 6 節では、以上の考察から得られた結論を述べる。

2. 援用する認知言語学の諸概念について

本節では、本稿で援用する認知言語学の諸概念について確認する。

2・1 意味拡張に関するメタファー、メトニミー

本稿で援用する意味拡張に関する比喻をフレームの観点から次のように定義する。(Lakoff and Johnson 1980¹⁾; Fillmore 1982²⁾; 西村 2008³⁾; 鍋島 2011⁴⁾, 2016⁵⁾)

メタファー: 異なるフレーム同士において、類似性もしくは共起性に基づくフレーム間の写像。

メトニミー: 単一の共有フレームにおいて、互いに異なる局面ないし段階を焦点化するフレーム内の写像。

2・2 フレーム意味論

語彙の背景にある日常の経験によって構造化された体系的知識を想定するフレーム意味論の立場を取る。フレーム意味論では、語彙の意味を事物に関する様々な知識と明確に分けることがで

きないと考えられている。また、フレーム自体にも構成要素を持つ性質がある。例えば、「商取引」のフレームには、SELLER、BUYER、GOODS、MONEY というフレームの構成要素が存在するとされている。(Fillmore 1982; 大堀 2005⁶⁾; 松本・陳 2018⁷⁾)

2・3 事象のタイプ

本稿では、他動性の観点に立つて事象を分類する。Hopper and Thompson 1980⁸⁾ は他動性の高低を測る 10 項目のパラメーターを設立し、通言語的な考察を通してその有効性を検証した。その 10 項目のうち、本稿における事象のタイプ分けに関わっているのは、「参与項の数が 2 つ以上」「状態よりも動作を表すこと」「意志を伴って行われること」「動作主性が高い」の 4 つである (Hopper and Thompson 1980; 菅井 2013⁹⁾)。それ以外の「肯定的か否定的か」「現実的か非現実的か」などの項目は、主に、対象への働きかけの度合いを測るもので、日本語と中国語における他動詞構文か自動詞構文かの選択に影響する要素ではないため、除外することにした。

また、典型的な他動的事象では、動作主と被動作主が存在し、動作主が意志をもって被動作主に影響を及ぼす。それに対して、典型的な自動的事象では、参与者が一人または一つで、参与者自らの状態や変化が表される。

3. 先行研究および日中語の共通点と相違点

管見の限り、「防止」と「避免」、「防ぐ」と「避ける」の類義に着目した先行研究はない。ここに、それぞれの意味を辞書の記述で確認する。

3・1 辞書における「防止」と「避免」の意味記述

《現代汉语词典》(第七版)

防止: 预先设法制止 (坏事发生)。(p. 369)

避免: 设法不使某种情形发生; 防止。(p. 74)

また、《新華詞典》(第四版)では、「防止」の構成要素の「防」、「避免」の構成要素の「避」について次のように意味記述されている。

防 (p. 268)

①戒备; 防守。例: 防洪|防御。

² 本稿では、西村 (1998¹⁰⁾) を援用し、動作主 (agent) と被動作主 (patient) を次のように定義する。動作主とは自らの力ないしエネルギーを、意図的にかつ自らの責任において用いることによ

って、〈対象〉の位置ないし状態に何らかの変化を生じさせるという目標を達成する主体で、被動作主 (patient) とは、エネルギーの到達点で、動作主からの行為を受けるもののことである。

②戒备的设施。例：城防|海防。

③挡水的建筑物。例：堤防。

避 (p. 58)

①避开。例：避风|不避艰险。

②防止。例：避免|避雷针。

《現代漢語詞典》の記述には“避免”の語釈として“防止”が用いられていることから、“防止”と“避免”は類義語であることが分かる。また、《新華詞典》における“防”の意味記述には、“防守”（防御）や“戒备的设施”（防御用の施設）があり、メトニミーに基づく意味拡張があると考えられる。さらに“防”を構成要素とする語の中に、“堤防”（堤防）“防护林”（保護林）“防火墙”（ファイヤーウォール）といった語があり、“防”の意味に、〈障壁を作ったりして自然災害や敵などからの侵攻に対抗すること〉が含意されているのが分かる。“防止”は基本的に抽象的な事象と共起するが、そのフレーム内には〈障壁を作ったりして自然災害や敵などからの侵攻に対抗する〉という具体的・物理的な動作が潜在していると考えられる。

一方、《新華詞典》における“避”の意味記述には、“避开”（よける）がある。さらに“避”を構成要素とする語の中には、“避风港”（避難港、安全な避難所）“避暑”（避暑）“躲避”（避けて隠れる）といった語があり、“避”の意味には、〈望ましくないと思われる場所や物事から離れたたり近づかなかったりすること〉が含意されているのが分かる。“避免”は基本的に抽象的な事象と共起するが、そのフレーム内には〈望ましくないと思われる場所や物事から離れたたり近づかなかったりすること〉という具体的・物理的な動作が潜在していると考えられる。

このように、“防止”と“避免”の意味の基盤となる具体的な意味には差があり、共起できる事象のタイプに影響すると考えられる。

3・2 辞書における「防ぐ」と「避ける」の意味記述

『大辞林』（第三版）

防ぐ (p. 2218)

①外部から侵入しようとするのを、くいとめる。

「敵の猛攻を防ぐ」「外敵の侵入を防ぐ」

②風雨や寒さなどが内に入らないようにする。

「冷たい北風を防ぐ」「西日を防ぐ」

③悪いことが起ころうとするのを、あらかじめ手段を講じてくいとめる。防止する。

「病虫害の発生を防ぐ」「事故を未然に防ぐ」

④対抗して戦う。

「防く者あらば討取れ/平治」

避ける (p. 1003)

①好ましくない人・物・事態に近づかないように、あるいは触れないようにする。よける。

「危険な場所を避けて迂回する」「危うく高台に難を避けた」

「ツバメは冬の寒さを避けるために南へ渡る」

「人目を避けて暮らす」「混雑を避けて早朝に出発する」

②好ましくない結果を生むような行動をしないようにする。さしひかえる。

「事情を考慮して公表を避ける」

「混乱を避けるために入場を制限する」

「出すぎた発言は避けたほうがよい」

辞書の記述のように、「防ぐ」の基本的な意味には〈攻撃を抑えること〉、「避ける」の基本的な意味には〈望ましくないものから離れること〉が含意されており、それぞれ中国語の“防止”“避免”と対応している。また、「防」を構成要素とする語には、「堤防」「防護服」「防塁」などがあり、中国語の“防”と同様に、その意味に〈障壁を作ったりして自然災害や敵などからの侵攻に対抗すること〉が含まれている。一方、「避」を構成要素とする語には、「回避」「避難」「退避」などがあり、中国語の“避”と同様に、その意味に〈望ましくないと思われる場所や物事から離れたたり近づかなかったりすること〉が含意されているのが分かる。

3・3 日中語の差および“防”と“避”の根本的な相違

具体的・物理的動作がフレーム内に潜在している“防止”や“避免”とは異なり、「防ぐ」と「避ける」は具体的な事象と抽象的な事象のいずれも共起できる。これは次の (5ab) (6ab) にも裏付けられている。

(5) a. {*防止/防} 洪水。

b. 洪水を防ぐ。

(6) a. {*避免/避开³} 拥挤的人群。

b. 人ごみを避ける。

³ 本来、“*避免拥挤的人群”と“?避拥挤的人群”を比較するべきである。しかし、現代中国語では動詞を二字語化する傾向があり、一文字の動詞を“避开”や“避风”のように語の構成要素

素としてよく用いられるが、動詞と名詞からなる連語においては、二字語化した動詞を用いるのが一般的である。そこで、こうした一般的傾向のせいで容認されにくい“?避拥挤的人群”ではなく、“避开拥挤的人群”を比較に用いた。

(5)、(6) からは、中国語の“防止”と“避免”のほうが日本語の「防ぐ」と「避ける」より抽象度が高いことが分かる。ただし、抽象的な事象と共起する“防止”と“避免”は、具体的・物理的な動作を表す“防”“避”を認知の基盤としており、両者の間にはメタファー的な写像関係が存在する。

ここに、これら 4 語の意味を理解するための基盤となる“防”「防ぐ」に含まれる「攻防の事象」と“避”「避ける」に含まれる「移動事象」を図 1、図 2 に示す⁴。図 1 に示すように、“防”「防ぐ」に含まれる攻防の事象では、フレーム内に障壁などのような攻撃を遮断するようなものの存在が考えられ、2 者の間に対抗関係があると想定できる。一方、図 2 に示すように、“避”「避ける」に含まれる移動事象では、動作主が望ましくないと思われる場所や物事から離れたり近づくことを表し、動作主と場所や物事の間に対抗関係は存在しない。

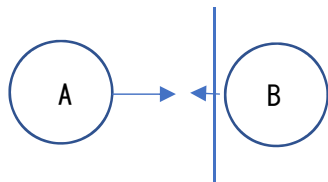


図 1 “防”「防ぐ」に含まれる攻防の事象

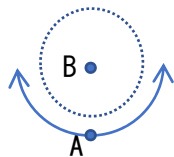


図 2 “避”「避ける」に含まれる移動事象

4. 考察

本節では、これら 4 語の対応関係を見る。第 3 節で議論したように、具体的な動作を表す場合の“防”と“避”、「防ぐ」と「避ける」は意味のずれが大きい。一方、第 1 節の (1ab) (2ab) が示すように抽象的な事象と共起する場合、意味が近く感じられる。

まず、“防止”「防ぐ」、「避免」「避ける」が含まれる構文の特徴を確認する。第 1 節の (1) ~ (4) が示すように、“防止”「防ぐ」、「避免」「避ける」が含まれる構文では、2 つの事象の存在がある

と考えられる。1 つは、主体にとって不利益な・望ましくない事象で、つまり防ぐ・避ける対象である。もう 1 つは、不利益な・望ましくない事象に対して、未然に生じないように対策する行為である。無論、次の (7ab) のように好ましくない事象しか言語化しない場合もあれば、(8ab) のようにこれら 4 語が後半の対策文に現れる場合もある。さらに (9ab) のように動作主を背景化する文もある⁵。

- (7) a. 他一直避免和他人深交。
b. 彼はずっと人との深い付き合いを避けている。
- (8) a. 要想减肥, 首先得 {/?防止/避免} 吃高热量的食物。
b. ダイエットしたいなら、まず高カロリーの食品を {/?防が/避け} なければならない。
- (9) a. 运动能 {防止/避免} 情绪低落。
b. スポーツは気分の落ち込みを {防ぐ/?避ける} ことができる。

本稿では対照の便宜上、研究対象を第 1 節の (2) ~ (4) のような“为了 A, B”「A のために、B」のような構文に限定し、このような構文を「目的—対策構文」と呼ぶことにする⁶。この「目的—対策構文」は 2 つの文から成り立っており、前半の目的を表す文を目的文、後半の対策を表す文を対策文と呼ぶことにする。

4・1 後半の対策文の意味と語の選択との関係

本節では、「目的—対策構文」における後半の対策文の意味がこれら 4 語の選択に与える影響を見ていく。

(10ab) の後半の“建造了长城”「万里の長城が建てられた」は、障壁の営造という意味を表し、“防止”「防ぐ」のフレームに一致している。(11ab) の後半の“不去参加今晚的宴会”「今晚の宴会に参加しない」は、望ましくないことから遠ざけるということを表し、“避免”「避ける」のフレームに一致している。そのため、それぞれの文において、“防止”「防ぐ」と“避免”「避ける」では容認度に差が出る。

- (10) a. 在中国曾经为了 {防止/?避免} 外族的入侵, 建造了长城。

- b. 気分の落ち込みを {防ぐ/?避ける} ために、たくさん運動したほうがよい。

⁶ 言うまでもなく、防ぎたい・避けたい事象が好ましくない事象に限定しているため、本来「目的—対策構文」のサブ構文に属する。

⁴ 図 2 は長嶋 1976:54¹¹⁾ の図 2 を参照して描いたものである。

⁵ (9ab) のような文は次の (ア ab) のような「目的—対策構文」とパラフレーズの関係がある。したがって (7ab) を、目的と対策の部分のみを言語化し、動作主を背景化する構文として捉えることができる。

ア a. 为了 {防止/避免} 情绪低落, 要多做运动。

- b. 中国では他民族の侵略を {防ぐ/避免} ために、万里の長城が建てられた。
- (11) a. 为了 {防止/避免} 见到前男友的尴尬, 她决定不去参加今晚的宴会。
- b. 元彼氏に会う気まづさを {避ける/防ぐ} ために、彼女は今晚の宴会に参加しないことにした。

(例 (4) 再掲)

このように、後半の対策文の意味が、動詞のフレームに一致するかどうかは、動詞選択を決める基準の1つであることが分かる。つまり、対抗関係をもち、障壁などのような攻撃を遮断するものが存在する場合、“防止”「防ぐ」が選ばれやすい。それに対して、望ましくないと思われる場所や物事から遠ざけるという意味を表す場合、“避免”「避ける」のほうが相応しいことが分かる。

4・2 前半の目的文に含まれる不利益な事象のタイプと語の選択との関係

本節では、「目的—対策構文」における前半の目的文に含まれる不利益な事象のタイプがこれら4語の選択に与える影響を見る。

まず、目的文に含まれる不利益な・望ましくない事象のタイプを分類する。採取できた事例に対して、「参与項の数(1つ or 2つ以上)」「事象の性質(状態的 or 動作的)」「意志性(有 or 無)」「主体の有生性(有情物 or 無情物)」というパラメーターに基づき、次の5パターンに分類した⁷。それぞれの特徴を見る。

パターンⅠ：

参与項の数が2つ以上、意志的・他動的行為、主体が有情物である。不利益な事象の主体と主節の主語が対抗関係にある⁸。

- (12) a. 为了 {防止/避免} 网络攻击, 必须采取有效的安全措施。
- b. サイバー攻撃を {防ぐ/避免} ために、有効なセキュリティ対策を立てなければならない。
- (13) a. 中国曾经为了 {防止/避免} 外族的入侵, 建造了长城。
- b. 中国では他民族の侵略を {防ぐ/避免} ために、万里の長城が建てられた。

(12ab) (13ab) が示すように、パターンⅠに当てはまる事象の場合、中国語においても日本語においても“避免”「避ける」より、“防止”「防ぐ」のほうが容認度が高い。

その理由は、不利益な事象 (e.g. 「相手がこちらのサイバーを攻撃すること」「他民族が中国を侵入すること」) は典型的な他動詞構文で、“防止”「防ぐ」のフレームに含まれる攻防の事象に一致しているためであると考えられる。

パターンⅡ：

参与項の数が2つ以上、意志性が高い行為 (e.g. 「人と付き合う」、「ライバルと競争する」) と意志性があまり感じられない行為 (e.g. 「上司とトラブルになる」、「(人) 口論になる」) の両方が存在し、主体が有情物である。この行為は中国語の“和”や日本語の「と」を伴う相互動作⁹であり、対象への影響性から考えると、パターンⅠより他動性の低いものである。不利益な事象の主体と主節の主語が一致している。

- (14) a. 他为了 {防止/避免} 和他人交往, 总是闭门不出。
- b. 彼は人との付き合いを {防ぐ/避ける} ため、いつも家に閉じこもっている。
- (15) a. 为了 {防止/避免} 和竞争对手公司的激烈竞争, 那家公司开始进行不同产品的开发。
- b. ライバル社との激しい競争を避けるため、その会社は違う商品の開発に乗り出した。
- (16) a. 为了 {防止/避免} 和领导发生摩擦, 犯了错误后最好立刻道歉。
- b. 上司とトラブルになるのを {防ぐ/避ける} ためには、失敗後すぐに謝罪した方が良い。
- (17) a. 为了 {防止/避免} 争论而闭口不开。
- b. 口論になるのを {防ぐ/避ける} ために口を閉ざす。

(14ab) ～ (17ab) が示すように、このような事象の場合、中国語においても日本語においても“防止”「防ぐ」より、“避免”「避ける」のほうが容認度が高い。

この理由として、次のようなものが考えられる。ここで見た各例において、不利益な事象 (e.g. 「人と付き合うこと」「ライバル社と競争すること」「上司とトラブルになること」「人と口論にな

⁷ 5パターンしか観察できなかったのは、主体の有生性と意志性のような、完全に独立したパラメーターではなく、互いに依拠しているパラメーターが存在しているためであると考えられる。

⁸ 本稿では、主体と主語を次の考えに基づき、使い分けている。主体とは、ある事象における動作主などの意味的な主体のこと

であり、主語とは統語的に現れている文(主節)の主語のことである。

⁹ 相互動作の事象では二人以上の参加者が必要である。相互動作の相手は、述語が表す事象が成立するためになくはならない必須の要素である(日本語記述文法研究会(編)2009:49¹²)。

ること」)の主体は、文の主節の主語である。つまり、問題となる不利益な事象とは、自らの行為によって生じうるものである。そうすると、攻防事象としての概念化よりも、不利益な方向を選ばずに賢明な方向を選ぶという主体的な移動事象としての把握のほうが自然となり、結果として「避ける」が選択される。

パターンⅢ：

参与項の数が1つ、意志的行為、主体が有情物である。参与項の数が1つしかないため、パターンⅠ、Ⅱと比べ他動性の低い行為である。不利益な事象の主体と主節の主語が異なる。

- (18) a. 为了{防止/??避免} 学生考试作弊, 老师采取了以下对策。
 b. 学生のカンニングを{防ぐ/??避ける} ために、教師は以下の対策を取った。
- (19) a. 为了{防止/?避免} 年轻人自杀, 政府在全国开设了热线电话。
 b. 政府は若者の自殺を{防ぐ/?避ける} ために、全国でホットラインを開通させた。

(18ab) (19ab) が示すように、パターンⅢに当てはまる事象の場合、中国語においても日本語においても“避免”「避ける」より、“防止”「防ぐ」のほうが容認度が高い。

その理由は、不利益な事象において、意志を持つ主体 (e. g. 「学生」「若者」) が存在し、主節の主語 (e. g. 「教師」「政府」) にとって、このような不利益な事象から遠ざけるというより、積極的に関与する、つまり二者の対抗関係の一種として捉えられやすいためと考えられる。

パターンⅣ：

参与項の数が1つ、非意志的な変化事象、主体が有情物である。参与項の数が1つである上に非意志的な変化事象であるため、パターンⅠ、Ⅱ、Ⅲよりも他動性の低い行為である。不利益な事象の主体と主節の主語が一致している。

- (20) a. 为了{防止/避免} 得老年痴呆, 他坚持每天学2个小时外语。
 b. 認知症(になるの)を{防ぐ/避ける} ために、彼は毎日2時間外国語の勉強を続けている。
- (21) a. 为了{防止/避免} 中暑, 要注意以下事项。
 b. 熱中症(になるの)を{防ぐ/避ける} ために、次のことに気をつけましょう。

(20ab) (21ab) が示すように、パターンⅣに当てはまる事象の場合、中国語においても日本語においても“防止”「防ぐ」と“避免”「避ける」の両方が容認できる。また、“防止”「防ぐ」のほうがより自然である点においても日中語が一致している。

その理由は、“防止”「防ぐ」のフレームに含まれる攻防の事象と、“避免”「避ける」のフレームに含まれる移動事象のどちらも解釈できるためと考えられる。具体的には「防ぐ」と共起する場合、このような不利益な事象を外的な脅威として捉え、対抗関係という「防ぐ」のフレームを用いて解釈される。「避ける」と共起する場合、このような不利益な事象をリスクとして捉え、不利益な方向から遠ざける移動事象という「避ける」のフレームを用いて解釈される。また、“防止”「防ぐ」のほうがより自然な表現であると解釈される理由の1つは、このような〈病〉の意味特徴を持つ名詞と共起する動詞として“预防”「予防する」が最も自然で、その類義語の影響があるためと考えられる。つまり、“预防针”「予防接種」や“预防医学”「预防医学」のような語彙が定着しており、何らかの疾病が起こらないため、事前に防ぐという前提が想定されやすい。

パターンⅤ：

参与項の数が1つ、非意志的变化事象、主体が無情物である。参与項の数が1つ、非意志的な変化事象の上に主体が無情物であるため、5パターンのうち他動性が最も低い行為である。

- (22) a. 为了{防止/避免} 苹果切片变色, 有一个方法是把它浸入在盐水中。
 b. スライスしたリンゴの変色を{防ぐ/??避ける} ために、塩水に漬ける方法がある。
- (23) a. 为了{防止/避免} 室内干燥, 建议使用加湿器。
 b. 部屋の乾燥を{防ぐ/??避ける} には、加湿器がおすすめ。
- (24) a. 为了{防止/避免} 病毒的扩散, 有必要隔离感染源者。
 b. ウイルスの広がり(を)を{防ぐ/??避ける} には、感染者を隔離する必要がある。

(22ab) ～ (24ab) が示すように、パターンⅤの事象の場合、中国語においてはいずれも容認できるのに対して、日本語では「避ける」より「防ぐ」のほうが容認度が高い。中国語と日本語の違いとその要因については第5節で詳しく検討するが、ここでパターンⅤの事象の特徴を見る。

上述の4パターンの事象とは異なり、「リンゴの変色」も「部屋の乾燥」も「ウイルスの広がり」も無情物を主語にとり、内的で自然に生じる変化事象に属している。つまり、人が放置すれば、

自然にそうなるという事象である。中国語においても日本語においても、このような事象が生じないように、積極的に関与する意味を表す「防ぐ」を用いることができるという点で一致している。一方、日本語と異なり、中国語では“避免”も容認できる。この差については第5節で詳しく議論する。

以上の考察をまとめ、次の表1、2に示す。

表1 「目的—対策構文」における“防止”と“避免”

	不利益な事象の特徴			2つの 事象の 主語	例	共起 傾向
	参与 項	意志	有情物 主体			
①	2つ 以上	+	+	不一致	网络攻击 外族入侵	◎防止 *避免
②	2つ 以上	±	+	一致	和他人交往 和竞争对手公司竞争 和领导发生摩擦 争论	*防止 ◎避免
③	1つ	+	+	不一致	考试作弊 自杀	◎防止 ?避免
④	1つ	-	+	一致	得老年痴呆 中暑	◎防止 ○避免
⑤	1つ	-	-	不一致	苹果切片变色 室内干燥 病毒的扩散	◎防止 ◎避免

表2 「目的—対策構文」における「防ぐ」と「避ける」

	不利益な事象の特徴			2つの 事象の 主語	例	共起 傾向
	参与 項	意志	有情物 主体			
①	2つ 以上	+	+	不一致	サイバー攻撃 他民族の侵略	◎防ぐ *避ける
②	2つ 以上	±	+	一致	人との付き合い ライバル社との競争 上司とのトラブル 口論になること	?防ぐ ◎避ける
③	1つ	+	+	不一致	カンニング 自殺	◎防ぐ ?避ける
④	1つ	-	+	一致	認知症になること 熱中症になること	◎防ぐ ○避ける
⑤	1つ	-	-	不一致	スライスしたリンゴ の变色 部屋の乾燥 ウィルスの広がり	◎防ぐ ?避ける

5. 日中語の違いとその要因

第4節の考察で明らかになったのは、5パターンの不利益な事象のうち、中国語と日本語は4パターンの事象において類似した傾向を見せているが、「リンゴの变色」や「部屋の乾燥」のような無情物主語非意志的变化事象においては、日中語に不一致が見られる。本節ではその要因を探る。

前述のように、“防止”「防ぐ」のフレームには攻防の事象が含まれ、対抗の関係に基づき事象を捉える。一方、“避免”「避ける」のフレームには移動事象が含まれ、不利益な事象から遠ざけるというふうに事象を捉える。この点が“防止”「防ぐ」と“避免”「避ける」の根本的な相違点である。

また、表1、2に示すように、不利益な事象の主体と主節の主語が一致している場合、“避免”「避ける」のフレームを用いて移動事象として解釈されやすく、不利益な事象の主体と主節の主語が不一致の場合、“防止”「防ぐ」のフレームを用いて対抗の事象として解釈されやすいという傾向が見える。

日本語の場合、以上と同一の解釈で、「スライスしたリンゴの变色」や「部屋の乾燥」のような無情物を主語にとる事象に当てはめることができる。つまり、この場合「避ける」の容認度が低い理由は、「避ける」を用いると、不利益な事象から遠ざけるという解釈になり、自ら生じる事象を事前に起こさせないという目的と一致しないためである。

一方、中国語では、“学生考试作弊”（「学生のカンニング」）“年轻人自杀”（「若者の自殺」）のような不利益な事象の主体が有情物である場合、以上と同一の解釈をすることができるが、不利益な事象の主体が無情物である場合、“避免”のフレーム内に潜在している移動事象が継承されず、単なる「不利益な事象が生じない」という意味として捉えられる。

この要因の一つとしては、中国語の“防止”“避免”は日本語の「防ぐ」「避ける」より抽象化の程度が高いためであると考えられる。第3節に述べたように、中国語の“防止”“避免”のフレーム内には、具体的・物理的な動作が潜在しているが、取りうるヲ格名詞句を見れば、“*防止洪水”“*避免人群”が不適格であるように、あくまでも抽象的な事象としか共起せず、日本語の「防ぐ」「避ける」より抽象化の程度が高いことが分かる。すなわち、「避ける」のフレーム内に含まれる移動事象がそのまま抽象的な事象にも継承されている日本語では、主節と従属節の主体が一致するという制約を持っているのに対し、中国語の場合、“避免”のフレーム内に潜在している移動事象は、有情物主体の場合そのまま継承されるが、無情物主語の場合、継承されない。むしろ、“避免”の適格性を決める最も核心的な要素が、不利益な事象の主体の意志性であるといえよう。つまり、中国語では不利益な事象の主体

が意志性を伴わなければ、「避免」が選択される傾向が見られる。無論、有情物主語の場合「付き合い」や「競争」などは意志的な事象として捉えられるが、「避免」を用いることで、その意志性が解消されるのである。

6. おわりに

本稿では、フレーム意味論の観点から、「防止」「防ぐ」「避免」「避ける」のフレームおよびそれぞれの語と共起する事象の特徴などについて考察した。考察の結果を以下の5点にまとめる。

- ①「防止」「防ぐ」のフレームには〈障壁を作ったりして自然災害や敵などからの侵攻と対抗する〉という攻防の事象が含まれる。一方、「避免」「避ける」のフレームに〈望ましくないとと思われる場所や物事から離れたり近づかなかつたりする〉という移動事象が含まれる。
- ②「目的-対策構文」における動詞選択を決める基準の1つは、後半の対策文の意味が、動詞のフレームに一致するかどうかである。
- ③「目的-対策構文」の前半の目的文では、防ぐ・避ける対象となる不利益な事象は「参与項の数(1つ or 2つ以上)」「事象の性質(状態的 or 動作的)」「意志性(有 or 無)」「主体の有生性(有情物 or 無情物)」というパラメーターに基づき、5パターンに分けられる。
- ④5パターンの事象のうち、有情物主語の事象である4パターンと共起する場合、中国語と日本語は、類似する傾向が見られる。具体的には、不利益な事象の主体と主節の主語が一致している場合、「避免」「避ける」のフレームを用いて移動事象として解釈されやすい。一方、不利益な事象の主体と主節の主語が不一致の場合、「防止」「防ぐ」のフレームを用いて対抗の事象として解釈されやすい。ただし、「熱中症になる」のような〈病〉の意味特徴を持つ事象では、2つの事象の主語が一致しているものの、「避免」「避ける」より、「防止」「防ぐ」のほうがより容認度が上がる。この要因として「予防する」という類義語の影響が示唆される。
- ⑤不利益な事象の主体が無情物である場合、中国語と日本語には不一致が見られる。「避ける」のフレーム内に含まれる移動事象がそのまま抽象的な事象にも継承されている日本語では、主節と従属節の主体が一致するという制約を持っている。一方、中国語では「避免」のフレーム内に潜在している移動事象は、有情物主体の場合そのまま継承されているが、無情物主語の場合、継承されない。むしろ、「避免」の適格性を決める最も核心的な要素が、不利益な事象の主体の意志性であるといえよう。

本稿では、「目的-対策構文」に限定して母語話者の内省に基づき、「防止」「防ぐ」「避免」「避ける」の共通点と相違点を考察したが、今後コーパス調査などを通してその結論を検証する必要がある。また、英語(prevent vs. avoid)などの他言語も考察の対象に入れ、このような言語現象は、日中語に特有の現象なのか、通言語的な現象なのかを見ることにより、一般化の可能性を探る。これらを今後の課題とする。

謝辞

本稿は、査読者から貴重なご指摘を数多く賜りました。また、東京大学院生の三田寛真氏からもたくさんの有益なご意見をいただきました。ここに記して感謝の意を表したいと思います。

参考文献

- 1) Lakoff, G. and M. Johnson. : Metaphors We Live By, University of Chicago Press. 1 Chicago, 1980. (渡部昇一・楠瀬享三・下谷和幸(訳): レトリックと人生, 大修館書店, 東京, 1986)
- 2) Fillmore, C. "Frame Semantics." In the Linguistic Society of Korea (eds.) Linguistics in the Morning Calm, pp. 111-137. Hanshin Publishing, Seoul, 1982.
- 3) 西村義樹「換喩の認知言語学」 森雄一・西村義樹・山田進・米山三明(編): ことばのダイナミズム, pp. 71-88, くろしお出版, 東京, 2008.
- 4) 鍋島弘治朗: 日本語のメタファー, くろしお出版, 東京, 2011.
- 5) 鍋島弘治朗: メタファーと身体性, ひつじ書房, 東京, 2016.
- 6) 大堀壽夫: 語彙記述におけるフレーム意味論, 日本認知言語学会論文集, 5, pp. 617-620, 2005.
- 7) 松本曜, 陳奕廷: 「泣く」—複合語を手がかりとしたフレーム意味論的分析—, 神戸言語学論叢, 11, pp. 50-57, 2018.
- 8) Hopper Paul J. and Sandra A. Thompson. "Transitivity in Grammar and Discourse." Language, Vol. 56, No. 2, pp. 251-299, 1980.
- 9) 菅井三実「他動性」 辻幸夫(編): 新編認知言語学キーワード事典, p. 224, 研究社, 東京, 2013.
- 10) 西村義樹「行為者と使役構文」中右実・西村義樹(著): 構文と事象構造, p. 107-203, 研究社, 東京, 1998.
- 11) 長嶋善郎「サケルとヨケル」 柴田武他(著): ことばの意味 1, pp. 47-55, 平凡社, 東京, 1976.
- 12) 日本語記述文法研究会(編): 現代日本語文法 2, p. 49, くろしお出版, 東京, 2009.

辞書

《現代汉语词典》(第七版) 商务印书馆 2016 年
 《新华词典》(第四版) 商务印书馆 2013 年
 『大辞林』(第三版) 三省堂 2006 年

(受理 平成 31 年 3 月 9 日)